



青森市の子育てを応援してます

サポセン通信

vol.34

2024.7.3 発行

うとう塾 6/6開催



講師：増田貴人さん

子どもの可能性を広げる早期支援

今年度最初のうとう塾は、弘前大学教育学部附属特別支援教育センター・センター長の増田貴人さんをお迎えして開講しました。

最初に、障害(障がい、障碍)には①医学的診断に基づいた心身機能の「障がい」の医学モデルと②周囲の大人や仲間との関係による「障害」の社会モデルの2つの考え方・とらえ方があり、社会モデルの「障害」を明確化し、それを軽減し子どもが活動に参加できるように工夫し実践するかが早期支援であり、日常的な支援(家庭教育や学校教育)になっていくと話されました。

子どもの発達の遅れ・偏りを確定的に診断・評価するのはとても難しく、低年齢であるほど診断が無い前提で援助を考えることが多くなります。「診断名」にこだわると「その子に必要な援助」を見落としかねません。大人たちの役割は、医学モデルの障がいの種類(診断名)を探すより、むしろその子の“対応の難しさ”社会モデルの障害をより小さくする援助・特性を理解し、励ましたり、ていねいに教える好意的な促進因子となる援助を探ることが大切だということです。

次に「集団に入れない」という課題に対し、困っているのは「誰」なのか、「入れない」を、何をもって判断しているのか? 「入らない」or「入り方を知らない」の可能性は考えているのか? の投げかけがありました。どんな行動でも①意欲②理解③遂行がすべてそろわなければ成立しません。行動のどこに問題があるのか? 整理することで、集団に入らない時、①かかわられることを意識的に避ける②何をすべきか理解せず、その場にいるだけ③意思はあっても、スキルが乏しい。ということを知る・考えることが大事とのことです。

援助や指導は、子どもなりの思考が尊重され・誘われ方が大事で、子どもだけでなく、繋がりがあがる家族・学校・仲間・地域などの関係性を重視し、全体的視点も大切です。そして、かたちが見えない「目的・意味」を明確化し、わからない漠然としたモヤモヤ・不安が困惑や怒りに繋がらないように心がけ、基本的な信頼関係と自尊心を育てるために、褒めるのではなく認める積み重ねやできる事に目を向けること、そして伝え方のポイントを話してくださいました。



～参加者の声～

- ☆診断名にこだわりすぎずに社会的モデルの障害をいかに小さくしていくかが大切だということ。行動の背景(意欲・理解・遂行)など、大変勉強になりました。
- ☆子どものやる気を出させるためには、圧力をかけずに長期的に時間をかけることが大事なんだと思いました。

青森市子育てサポートセンター

青森市子育てサポートセンターでは、家庭教育に関する学習機会の提供、青森市内の小中学校で行われている家庭教育学級の運営サポート、子育て講座《きらきら塾》や発達に心配のあるお子さんに関する講座《うとう塾》の企画運営、情報収集、発信、また子育てでの相談の対応等を行っています。

【TEL・FAX】017-774-6537 (開設時以外は、留守番電話をお願いします。)

【E-mail】aomorishi-saposen@arion.ocn.ne.jp

【住所】〒038-0813 青森市松原1丁目6-3
サンピア(勤労青少年ホーム)2F

【開設日時】毎週火曜日 10:00~13:00

【ブログ】<http://blog.goo.ne.jp/saposenrarara>



ブログQRコード



【プロフィール】臨床心理士・公認心理士。
小中学校でスクールカウンセラーをして
います。朝ドラに夢中です。

3回シリーズ【子どもの発達と親の関わりを考える】と題して、岩田彩子さんにお聞きしました。第3回目のテーマは

【小学校・高学年の発達の特徴と親の関わり方を考える】



お子様ランチで大満足していた子どもが大人と同じものをぺろりと食べられるようになり、親の背丈にもじわじわと迫ってきます。靴のサイズも大きくなってびっくりする時期です。そんな子どもの成長に親は頼もしさを感じますよね。一方で子どもは、自分の体の変化に戸惑います。自分が子どもでなくなっていくことや大人になっていく不安です。そして体の変化は見た目の変化です。周りの視線に敏感になり、鏡の前に立つ時間や服装を選ぶのにも時間がかかります。失敗への恥ずかしさも強く、親視線ではたいしたことのない行動を気にしすぎる一面もでてきます。

友だちづきあいもどんどん密になります。ゲームや走り回って遊ぶだけでなく、おしゃべりの楽しさも知ります。友だちとの会話で自分の知らなかった情報に会い、自分の家の当たり前が違うことにも気づきます。そのため親の考えとぶつかるようになります。それは、子どもが自分で考え、自分で決めていくことの入り口に立った証拠です。

これが思春期です。小学校高学年頃から突入し、中学生頃が最盛期です。子どもに話しかけても反応がなかったり、言いたくないと拒まれたり、親が子どもの日常を知る機会が少なくなります。それが心配で親が迫るほど、子どもから距離をとられてしまいます。親の良かれと思つてのアドバイスに噛みつかれることもしばしばです。とはいえ、精神的・経済的にはまだまだ親に頼らざるをえません。失敗もいっぱいするでしょう。そんなとき、親が子どもの思いや考えにじっくりと耳を澄ますことで、具体的なアドバイスをしなくても子どもが勝手に立ち直っていくことがよくあります。そうは言っても、うっかり口出して親子ケンカになるのは思春期のあるあるです。でもケンカは言い換えると意見交換です。子どもの自立を後押しする重要な栄養剤です。

子どもだけでなく、親も思春期に不安を感じがちですが、その特徴を知ることによって安心して今まで通り子どもとの時間を過ごしてほしいと思います。



合同企画講座 5/13 開催



講師：竹林正樹さん

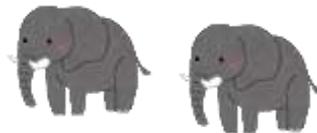
子どものやる気を引き出すナッジ

青森大学客員教授の竹林正樹さんを講師に迎え、ナッジ(人の心理特性に沿うことで子どもが自発的に行動を変えるように促す方法)の講座を開催しました。

ナッジ提唱者のRセイラー教授(米国)がノーベル経済学賞を受賞したこともあり、世界中で注目されています。

相手を動かすための最も基本的な方法は「正しい情報を教えること」です。でも、頭で理解しても、実際に行動に移せない子どもが多いのも事実です。理解と行動の間にギャップが生じる理由として、「直感と理性」という脳のシステムがあります。人の判断の大半は直感が行い、理性はいざという場面で発動します。直感には「認知バイアス」と呼ばれる習性があり、正しい情報を得ても歪んで解釈をしてしまうのです。例えば、「塾に行くと成績が伸びる」と分かっているのに、夜に塾の話を出されると「別に今まで通りでよい」と頑固な判断になりやすいのです(現状維持バイアス)。

相手を動かすには他に3つの方法があります。1つ目は「強制」で、確実に行動させられますが、虐待に発展



することもあり、最小限にするべきです。2つ目は「褒美と罰」で、効果が出やすい一方で、本人の自発性を阻害するといった問題点が指摘されています。3つ目は「ナッジ」です。先ほどの塾の話では、ランチを外食した後に提案することで、現状維持バイアスが弱まり、受け入れられやすくなります。

参加者からは「子どもは直感的に動くため、ナッジを知ることで、親の関わりも変わり、有効的と分かりました」「人間の脳が認知バイアスの影響を受けやすいためと理解でき、いろいろな場面で応用できる理論で参考になりました」との感想がありました。

